

大黒柱の下に 埋納された鉄球



田中靖二氏と鉄球・甕

下斎原の田中靖二氏宅に、家の大黒柱下に埋められていたという鉄球が保管されています。これは、昭和二〇〇二十三年頃に田中氏の弟が、当時住んでいた家の地下にサツマイモを保管するための穴を掘っている時に、囲炉裏と大黒柱の間付近の地下から発見されたものといえます。

鉄球は、直径約八cm、重量約二・五kgで、陶器の甕に入れ、蓋をし

て埋められていました。

この鉄球が見つかった家は、現在は取り壊されていますが、今から約三〇〇年前に建てられたそうです。

実はこの他にも、家の大黒柱付近に鉄球が埋められていたという事例は長藤や羽出西谷、上斎原など町域北部にいくつか存在します。

おそらくこれ以外でもまだ知られることなく埋まっているものも多く存在しているでしょう。

このように、家の地下に物品を埋めるという行為として思い浮かぶのは地鎮祭です。玉類やお金、仏具・神具などを地下に埋納して土地の神を鎮め、工事の安全を祈願する地鎮祭は古代から行われており、鉄球もこうした地鎮具であったと思います。石で作られた玉（玉石）を地鎮具として埋納する例は多くありますが、石ではなく鉄の球を



鉄球

埋めるというのは、どのような意味があつたのでしょうか。

昭和五十八年（一九八三）、現在の津山市加茂町でも大黒柱下から鉄球が発見されたという事例が報告され、調査が行われていますが、当時はこのような類例が知られておらず、「特別な理由に基づくもの」として、かくれキリシタンやこの地域で盛んであつた「たたら製鉄」とのつながりを推定していますが、確たる根拠はなく想像の域を脱していません。しかし、鏡野町でも北部にのみこのような例があるということは、たたら製鉄とのつながりについては可能性が考えられます。

島根県の松江城城下町では、発掘調査により発見された地鎮遺構二十二例のうち、鉄球が埋納されていた例が五例あります。また、和歌山県の和歌山城の幕末の天守再建の地鎮具の中にも鉄球が含まれており、鉄球の埋納について調査者は、平安時代末から鎌倉時代の真言宗の僧・覚禪が記した「覚禪抄」の記述から、鉄球は「火伏の修法」つまり神仏の霊力によって火災を防ぐという意味があつたと考えています。和歌山城の地鎮祭は、真



鉄球が埋納されていた家

言宗の僧侶が執り行ったことがわかっていますが、松江城下町や鏡野町域の地鎮祭がすべて真言宗の修法によって行われたわけではないでしょう。鏡野町では「鉄球を埋めると家が栄える」という言い伝えも残ることから、仏教の思想が民間信仰へと変化し、たたら製鉄が盛んで比較的鉄を入手しやすい環境にいた人々が地鎮のために埋納したと考える方が自然ではないでしょうか。

参考：『奥津町の民俗』『鉄球』信仰について
『松江城調査研究集録2』

協力：田中靖二氏

生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733